弟子たちの訓練

セッション3: 弟子訓練とは何か?(2b)

ロン・ライブリー、M.Div.、M.A.による提供 – BiblicalMentoring.org(学問)

ステップ1: 開会の祈り

ステップ2: それぞれが記憶の節を引用します: **ガラテヤ人への手紙 2:20**

「私はキリストと共に十字架にかけられた。もはや生きているのは私ではなく、キリストが私の内に生きている。そして今、肉体の中で生きる命は、私を愛し、私のために自らを捧げてくださった神の子への信仰によって生きている。」

ステップ3:*聖書の章を読み、議論する - **ガラテヤ人への手紙2章***

ステップ4: 個人申請やグループディスカッションのための質問:

一. 使徒パウロのことはキリストと共に十字架にかけられたと言えますが、私や他の人々が真の変容があったとどうやって言えるのでしょうか?

二. 著者の飛行機事故の物語を語ることを学ぶ?自分自身に死ぬことで本当に生きることについて?

三. あなたはキリストの贖いと贖いへの信仰によって従うよう召命や命令を聞いたことがありますか?

四. あなたはキリストを主として従い、弟子を彼のように育てる行動を起こす決意をしましたか?あなたのような?

五. フィリップスの「生殖なしに弟子訓練はない」という言葉に賛成し、肯定しますか?もしそうなら、神がこの計画を祝福してくださるよう祈れる人にあなたの行動計画を共有してください。

ステップ5*: 本の内容を読んで議論してください:*

著者キース・フィリップスによる第2b章:

神の救いの賜物は人間の最も重要な必要を満たしますが、この人道的で自分のために行動するという主張は、キリストが十字架で死んだ究極の理由を完全に無視しています。神は主に、御子の人格を持つ人々を通じて自分自身に栄光をもたらすために救いを与えます(エペソ1:12)。神の栄光は人間の福祉よりも重要です(イザヤ書43:7)。救いの目的を理解する者は、キリストの主権を受け入れずに人が救われると推測する勇気はありません。私が自分の命の主であるなら、キリストは私の人生の主にはなり得ません。キリストが支配するためには、私は死ねなければなりません。私は自分自身に死を告げ、私の罪のために死んだキリストと同一視しなければ弟子にはなりません(マルコ8:34)。弟子は主に従い、十字架に至るまで続きます。長い間、「自己死」の実用的な意味を理解しようと苦闘してきました。この決定は、自己放棄が私の人生の中でどのように具体化されるのでしょうか?ガラテヤ人への手紙2章20節を黙想しているときにようやく実感しました。「私はキリストと共に十字架にかけられた。そしてもはや生きているのは私ではなく、キリストはわたしの中で生きている...」

1月1日、私はカンザスの上空を飛行していたとしましょう。私の体は地面に落ち、衝撃で死んでいました。やがて農夫

が私の遺体を発見しました。脈も鼓動も呼吸もありません。体は冷たかったです。明らかに私は死んでいました。そこで農夫は墓を掘りました。しかし、遺体を土に埋めた時には暗くて隠せませんでした。翌朝に終わらせることに決め、彼は家に戻りました。そしてキリストが私のもとに来て言いました。「キース、あなたは死んだ。あなたの地上での命は終わった。しかし、私の望むことを何でもし、どこへでも行くと約束するなら、新しい命の息吹を吹き込んであげよう。」私の即座の反応は、「そんなはずはない!それは理不尽だ。奴隷制だ」と言われた。しかし、自分が交渉の余地にいないことに気づき、すぐに正気に戻りました。私は心から同意しました。するとすぐに、肺や心臓、そして他の重要な臓器が再び機能し始めました。私は生き返りました。私は生まれ変わったのです!それ以来、キリストが私に何を頼まれようと、どこへ行けと言われようと、私は喜んで従いました。どんな仕事も難しすぎず、時間が長すぎず、危険な場所もありません。何も不合理ではありませんでした。なぜでしょう?なぜなら、私は自分の人生に権利がなかったからです。私は借り物の時間、キリストの時間に生きていました。キースは1月1日にカンザスのトウモロコシ畑で亡くなりました。そして私はパウロと一緒にこう言えるでしょう。「私はキリストと共に十字架にかけられた。そしてもはや生きているのはキースではなく、私の中に生きているキリストです...」と言えるでしょう。それこそが自死と新生の本質です。キリストの「わたしに従いなさい」という命令は、新しい命を経験するために彼の死に参加するよう促すものです。あなたは生ける死者となり、完全に彼に献身します。人生の大きな逆説は、この死の中に大きな自由があることです。死者はもはや自分の権利や独立、他人の意見など気にしません。十字架にかけられたキリストと霊的な結合を結んだとき、世が大切にしていた富や安全、地位といったものは手放されました。「今やキリスト・イエスに属する者は、情熱と欲望を持つ肉体を十字架にかけた」(ガラテヤ人への手紙5:24)。十字架を背負い、キリストと共に十字架にかけられた者は、明日を心配しません。なぜなら自分の未来は他者の手に委ねられているからです。ある都市部の労働者は大胆なストリートミニストリーを設立することを夢見ていました。しかし、彼が望んだ奇跡が実現しなかったため、彼は幻想に頼り、出会いを歪め、架空の出来事を作り出し、他者の尊敬を促そうとしました。彼は壮大なビジョンに囚われ、自分の期待に囚われてしまいました。彼の無意識の動機は、王国のために英雄的な偉業を成し遂げてキリスト教世界の畏敬と称賛を得ることでした。彼の情熱や夢、幻視は決して十字架にかけられることはありませんでした。彼は成功し、成果を上げるというプレッシャーから解放されることもありませんでした。彼は証明するものがなく、失うものもないという解放感を経験したことはありませんでした。彼は弟子としての認識を歪めていました。彼は栄光を受け取るために神に仕えたいと望んでいました。対照的に、死んだ者は神の栄光のためにあらゆることをする自由を得ます(ローマ8:10)。彼は自分自身のすべて、持っているすべてを神の永続的な自由の手に委ねます。キリストの主権への服従は、彼が下すすべての決断、発する言葉、考えるすべての思考において神を喜ばせる力を与えます。弟子は自分の人生と奉仕のすべてを礼拝と見なします(コリント第一10:31)。

自己死は彼に神との愛を楽しむ自由を与えます。自己死は弟子になるための必須の前提条件です。自己死を経験していない者は、子孫を残せないため、弟子訓練の正当なリンクとして認められません。イエスはこう教えました。「...小麦の一粒が地に落ちて死なない限り、それは自分自身で残る。しかし死んでも、多くの実を結ぶ」(ヨハネ12:24)。子孫がなければ弟子制度は存在しない。
(18b-20ページ)

ステップ6: 最後に、個人的な祈りの願いと、それぞれが他の祈りのために祈っていることを共有します。

出典:キース・フィリップス博士著『The Making of a Disciple』。フレミング・H・レヴェル社出版、1981年。ISBN 0-8007-1181-5。ロバート・E・コールマンによる序文。内容(勉強問題を除く)は本書から抜粋し、改訂は加えていない。

改訂20261011